

随  
笔

## 文芸祭賞

### 川柳で言葉の力を磨く

千里同風

定年退職後の人生は、新しい挑戦や趣味を見つけ  
る絶好の機会ともいえる。

チャンスは突然やってくる。市広報「川柳教室  
『初心者大歓迎』川柳は心のオアシス」に目がと  
まった。川柳は五七五わずか十七音の短い形式で、  
人間の営みや日常の笑いや皮肉を巧みに表現する。  
これなら私にもできるかもしれない。

社会との繋がりが薄れた私には四つの願いがあ  
る。「友人がほしい」「健康でいたい」「趣味を楽し  
みたい」「人の役に立ちたい」シニアライフを充実  
させる大切な要素だ。なんだか私の願いを叶えてく  
れそうな予感がした。

早速、句会見学に出かけた。いきなり句箋を渡さ  
れる。

「思いの丈を五七五に詠んでみてください」  
ビギナーズラック、はたまた付度だろうか、人生初  
めて創作した句が入選したではないか。有頂天、天  
にも昇る気持ちだ。即入会を決めたことは言うまで  
もない。

川柳上達のコツは「多読多作」に尽きる。毎日優

れた句を読んで書き写したり一日五句を目標に句を作ったりしている。じっくり考えても一句もできないときもあれば、あまり深く考えなくても二、三句と次々と生まれるときもある。テンションも上がり楽しくなる。

一度句を作って、それで終わりではない。推敲、すなわち作品を磨く過程が重要になる。五七五の音数に合うように類義語を調べたり、言葉を選び直したりする。助詞一字を調整し、川柳の深みやリズム感を向上させる。時には上五と下五の語句を入れ替えて推敲を重ねる。五月下旬、例年より一足早い梅雨入りの報道から早速一句捻ってみた。

#### 「雨粒と代田の蛙二重奏」

田植え前、水を張った代田に大粒の雨が音を立てて降り始めた。と同時に蛙も歌い出す。同時進行の様があったかも擬人法二重奏（デュエット）かのようだ。上五の「雨粒と」の助詞「と」は並列の接続助詞。推敲を加え、累加の「に」も考えた。

#### 「雨粒に代田の蛙二重奏」

代田に降り始めた雨粒の音にはっと目覚めた蛙が

「えっ、もう梅雨入り？」と驚き雨粒を追うかのよう  
に歌い出す。微妙なズレ、タイムラグも内包されて  
いる。

さてさて、どちらを選択するか熟考に迫られる。  
「と」だと蛙の鳴き声の力が落ちるような気がする。  
雨粒と蛙の鳴き声それぞれ二分の一で合わせて  
一のパワーになる。「に」だと雨粒が一のパワーに  
なり、少し遅れた蛙の一のパワーが加わり合計二の  
パワーとなる。梅雨入りの代田、蛙の鳴き声で生き  
生きとした情景が思い浮かぶ。

何度も声に出して読み、五七五のリズムが良い  
「雨粒に代田の蛙二重奏」に決めた。

ライバルと目す柳友A子さんの存在も欠かせない。  
女性特有の感性の秀句は斬新で学ぶべき点も多  
い。

「私は趣味の範囲で楽しめればいいのよ」  
と謙遜するが持ち前の負けず嫌いで努力家だ。心の  
機微を巧みに表現し、平易な言葉選びの句は私では  
到底及ばない。SNSライン友、日常的に句を交し  
たり、校正し合ったり、忌憚のない意見や感想を交

換し合ったりもする。

自分一人だけの推敲では自ずと限界もあり、作風も固定化され一人よがりの句になりがちになる。彼女との切磋琢磨はありがたい。句会にも参加している。句箋に清書し投句を済ませる。一時間ほど選者披講を待つ。柳友と近況報告や情報交換する。他吟社川柳大会の結果に一喜一憂したり反省したりと忙しい。

待ちに待った選者披講。期待と緊張の空気が会場を包み込む。選者の澄み切った威厳に満ちた朗吟。自分の句が読まれたら間髪を入れずファーストネームの呼名で応える。リズムとテンポのよい句はやはり優れている。人間の感性の違いから発想が多様な句に触れることができ学びの場となる。

選者披講、入選、佳作、秀句、特選句と続く。さてさて、課題「備える」私の句

「備忘録どのページにも友がいる」

ありきたりではない発想に自信満々だったが、なかなか読んでもらえない。「ああ、また全没か」ふと脳裏をよぎる。果たして、自分の句は場違いなのだ

ろうか。次々と読まれる句には、しつかりと作者の世界観が表現されている、正直、凄いと思った。それに比べ私の句は没句なのだろうか……ますます心細くなる。

最後に私の句を読んでもらえた。「やった、特選句だ」思わず手を挙げ「まさのぶ（正信）く」と呼名叫んだ、同時に惜しめない拍手が私を祝福した。句会の最後、特選句四句が並べられ投票で最優秀句にも選ばれた。

「五七五前頭葉が泣き笑い」たかが十七音、されど十七音の世界。言葉で心が揺らぐ人間の営み。喜怒哀楽や日常の笑いや皮肉を表現する川柳。迷いながら、悩みながら、それでも言葉の力を磨く旅を楽しんでいきたい。

秀作

和のものが好き

宮島 早苗代

長身で細身の体に和服を着て、腰に小さく兵児帯を結んで立っている姿は、まるで電信柱に衣をまとわせたようだった。父は肺気腫を患い酸素を補給するようにになると和服で通院を始めた。鼻孔から酸素ボンベに延びたホースがあるので、これは妙案だった。元々父は家庭着やお正月、お参りなどには着物を着ることが多かった。

八十路を越えた父が、大病院の駐車場から病気とポンベを引きずって歩くのは不憫で、四人兄妹で送迎をしたが、お迎えは自由のきく私が行くことが多かった。病院の広い待合室の中でも和服姿の父は直ぐに分った。玄関先に停めさせてもらった車まで、父とゆっくり歩いていると、遙か昔の子供の頃に戻ったように心が華いで、背に受ける周りの人々の視線を、訳もなく誇らしく感じるのだった。

父の妹、叔母も終生和服だけで通した人。その孫娘は学生時代からお茶を習っていたが、その目的がふるつている。曰く「着物が着られるから！」

さて、このような環境で育った私が「和服大好き」は言うまでもない。だが残念ながら私は厳しい

労働を強いられる農家に嫁いで来て、土と汗に塗れる野良仕事に、舅、姑の世話も加わり、和筆笥の奥のことなど思い出すこともない明け暮れが続いた。やがて「嫁」と母親からも解放されると、私の中で眠っていたものが頭をもたげてきた。

ところがいつの間にか世の中はすっかり様変わりして、着物姿はひどく目立つことに気づいた。臆病の私には、それに耐える勇氣はなく、悶々としてゐる間に、心臓に毛でも生えて来たのか「日本人が着物を着ることは悪いことをしているのではない！」こんな自分なりの答えが出せて、同窓会など機会があると和服で装うようになった。

「血は水よりも濃い」と言うが、私の次男も和服党で、本人の希望で父の遺した着物がもらつてある。

次男の三人の息子達にも驚く。下駄が好きで、子供用の下駄をぺちんこになるまで履いていたが、ある日、小一だった長男は、玄関に置いてある「厚歯」と呼ぶ大きな男物の下駄を、四歳の弟は下駄箱の中から、赤い鼻緒の桐の下駄を探し出して来て、

カラコ口と歩いてゐるではないか！

このような孫達の日常を見ながら、私は何が彼等を惹きつけるのだろうと考えた。素足に当る木の感触と、地面を打つ響きが耳に優しく届くのか。大自然に育った木の一片を通して、大地の息吹でも彼等の心には伝わってくるのだろうか……。

この頃はまだ盆踊りが盛んで、村前の大きなお花屋さんで催されていた。今回は一歳半になった三男にも一ツ身を着せようと腰揚げをした。二人の兄のお下がりである。

盆踊り当日、小さな背に蝶々に結んだ帯を揺らし、チョコチョコ歩き回る姿は「文句なしに」かわいいい」。ところでこの兵児帯は夫の子供の時のもので、ぼとうつとした羽二重の肌触りは、近年のフワフワとした帯とは全く違う。夫の弟、私の息子二人。そして三人の孫達に受け継がれてきた兵児帯は、まだ輝きを失っていない。

黒の地にベージュと白を染め出した絞りはまだしっかりしほを保っている。無数の針の跡は、ひと針ひと針縫って絞って下さった方の息づかいさえ感

じられる。盆踊りたけなわになった頃、若くて美しいお母さんが、孫の帯に目を留められて、

「小学生の息子にこういうのを探したけれど、どうしても見つからなかったんです」

と声を掛けてこられた。思いがけないことに私は嬉しくなって事情をお話したら、とても感激して下さった。懐しい思い出である。

「和のものが好き」と、三兄弟の中の孫が、中学生の頃に言った。この子に着せた三ツ身は、私の長男に縫ったもの。三ツ身は身巾がなくて、着せられる期間は短い、なぜか昔から一度は子供に着せるものと聞かされていた。「おくみ」を力ギに切つて縫うので、裏表のない浴衣地を選んだことを、半世紀以上経つてもよく覚えている。

コロナもあつて世の中は大きく変つた。「和のもの」はどんどん忘れられて、私自身も置いてかれるような気持だが、かの恐竜でさえ絶滅した地球の歴史に目を向けて、時代の流れに逆うことは出来ないなどと、心の置き場を模索する昨今である。

孫達には本裁ちの浴衣とずっしりと重い帯も整え

ている。福島にいる長男に「盆踊りはないの。浴衣一式送ろうか」とラインしたが社会人になって日が浅い孫には余裕もないのか、はかばかしい返信はなかった。高校では茶華道を部活に選んだという孫達の、浴衣姿がいつの日か見られるのを楽しみにしている。

秀作

天国の父に歌声よ、届け！

山河ゆみこ

二〇二五年五月十八日、スイトピアセンター文化ホールのステージにわたしは立っていた。大垣音楽祭フォレストコンサート開演十分前、目の前の緞帳が間もなく上がる。席を埋め尽くした観客がわたしたちの歌声を待っていると思うと胸が高鳴った。わたしは何度も深呼吸をし、この先の人生で二度とないであろうこの緊張感を楽しもうと思った。

大垣市音楽祭フォレストコンサートの市民合唱団員募集を知ったのは、ポランティアをしている観光案内所で見えた大垣市の広報十二月号の記事だった。「フォレスト」はメンバー全員が音大・芸大卒の混声コーラスグループで、毎週月曜日の夜に「BS日本・こころの歌」という番組で美しいハーモニーを披露している。日本の叙情歌や童謡などを得意としているので、どちらかと言えば昭和世代に人気がある。

二〇一九年に亡くなった父も毎週欠かさず番組を観る大ファンだった。念願のコンサートにも二人で出かけた。実家のあった名古屋市民会館へは二度、

大垣市民会館へも一度足を運んだ。

特に二〇一七年十一月の大垣市民会館でのコンサートの際、父は肺疾患のため少し動く息苦しいという状況で、在宅酸素療法をしていた。それでも、どうしても行くと言ってきかなかったので、鼻にカニューレを付け、酸素ボンベのカートンを引いて出かけた。

誰もが知っているなつかしい歌の数々に酔いしれ、心温まる本当にすばらしいコンサートだった。父は感動のあまり、声に出して歌おうとするので、「お父さん、回りの人に迷惑だよ」と小声で注意するほどだった。

あのフォレストと同じステージに立てるなんてすごいことだ。しかも八曲も一緒に歌わせてもらえるなんて夢のような話だ。こんなチャンスは二度とないと思ひ、応募した。もし、父が生きていたらきっと喜んでくれるだろう。うれしそうな父の顔が浮かんだ。

考えてみれば、母が亡くなつて一人暮らしになつた父の寂しさを埋めてくれたのは大好きな歌だっ

た。九十歳になつた父を垂井へ連れて来て一緒に暮らし、話すことが増えた。

「実はなあ、若いころ、わしは東京にあつた陸軍戸山学校の軍楽隊に入りたかつたんだ」

初めて聞く話にびっくりした。そんな父の遺伝子か、わたしも歌うことや音楽が大好きだ。

短大で本格的な合唱と出会い、卒業後にはアマチュアの混声合唱団に入つて歌っていた。結婚を機に名古屋を離れて四十年以上、合唱とは縁がなかったが、また歌いたいという気持ちはずっと持ち続けていた。六十歳を過ぎて地元の人十人ほどの女声コーラスに誘われ、今も続けている。

しかし、今回のフォレストコンサートは久しぶりの混声でしかも総勢五十名近くの合唱団になる。とにかく楽しみだった。本番まで十回の練習が予定されていて、年明け早々の一月に結成式と初回の練習があつた。

集まつた顔ぶれはほぼ同世代で安心した。その場で配られた楽譜を開いて早速練習が始まつた。初回とはいえ、ほとんどの方が合唱経験者のようで、何

回かパート練習をするとすぐに四声が響き合って聞こえてきた。

さすがに迫力がすごい。背筋がゾクゾクした。四十数年前に混声合唱団で歌っていた頃の感覚がよみがえってきて、若返ったような気分になった。

月に二回の練習は毎回楽しみで、回を重ねるごとに厚みを増すハーモニーにワクワクした。わたしはスマホに録音して、自宅でそれを聴きながら繰り返し練習をした。横で聞いていた夫が、「おっ、きれいにハモつとるやん」と時折褒めてくれた。長いと思われた五か月もあつという間に過ぎ去つていった。

五月十七日、本番を翌日に控え、初めての合同練習が行われた。この日、わたしたちはフォレストのメンバー十名と初顔合わせだったが、アンサンブルをして細かい確認をした。立ち位置や楽譜の持ち方の注意もあつた。

いよいよ本番の日、心配された雨も降らず、無事にこの日が迎えられることにまずはホッとした。午前中はゲネプロと呼ばれる本番と同じように行う通

しりハーサルで最終確認をした。緊張感と高揚感に包まれた。

昼食後、着替えて開演十分前にはステージでスタンバイ。フォレストのリーダー、横山さんは振り返ってわたしたちの方を見ては、「皆さん笑顔だね」と声をかけてくれた。

開演のチャイムが鳴って緞帳が上がるとすぐにピアノのイントロが流れ出した。満席の客席の前にまばゆいライトを浴びて、わたしの夢のような時間が始まった。

お父さん、聞こえる？ 天国まで届くように一生懸命歌うからね。

秀  
作

トーストサンド

雫  
石  
つ  
み  
き

「タマゴのトーストサンドを食べたい」、妻がそう言ったのは入院生活のちょうど半ばだった――。

そんなことは嘘だと思っていた。虚像の中での抽象的なことだと思っていた、作り物のドラマや映画の中だけのことだと思っていた。然れども私には実際に絶望するようなことに出会った時、私の視界に入る周りの景色は現実には灰色の全景になった。私の周りには何も色が感じられない灰色の世界が広がっていた。早春の時季、私は突如として灰色の季節というものに出会ってしまったのである。

「もうだめ、ごめんね」

「どした？ 何がダメ？」

「ごめんね――」

その日、健康診断に行くと言っていた妻からのLINEだった。普段から余計なことはほとんど言わない妻であり、特に自分に不都合なことはなかなか言わない妻だったためか、私は真剣に受け止めるしかなかった。

健康診断後から入院までの暫しの間、妻の食生活は一日一食の生活になった。妻は好物であつても特

に積極的には食べることはなかった。私も食欲など疾うに喪失し、妻と同じ時間を過ごした。ゆっくりと時間が流れているようだった。然れどそのゆっくりと流れているように思われた時間も秒針だけは齷齪動き続け、時が進んでいるのは間違いないことだった。だから僅か一日一食でも妻とは毎食後には温かい緑茶を飲み、二人だけの穏やかな時間を過ごした。そして夕方には近所を二人で散歩した。たとえ自宅から半径二キロ以内の散歩でも普段は行くことがない区域などをいつものように手を繋ぎながら歩いた。

「こんなところに公園あるで」

「ほんまや、知らんかったわ」

「さっちゃんも知らんかったか……」

新たに発見した近所の小さな公園、そんな発見以来、冒険のように二人でまだ行ったことがない所を中心に散歩を続けた。日常という当たり前に過ぎゆく世界の中ではすぐ近くにあるものには案外、疎いのかも知れない。毎日の散歩の中で自宅周辺のエリアには公園以外にもノスタルジックで不思議な小径

や豪華な邸宅、お洒落なカフェなどもっと早く知ることができた。そして妻と共に新たに発見したカフェに次に来ることができるのか、仮に来たとしてもどんな思いで来られるのだろうか、妻と二人で来られるのだろうか、私はそんな些細なことを考えながら歩いていた。さらには次にこの発見したカフェに来たのなら、きつと妻との温かい思い出が残るのだろう、私は漠然とそのようなことを胸に刻んでいた――。

「今日はラッキーやで。晩御飯、酢豚定食やねん」

「酢豚か、よかったなー」

入院中の妻はよく病院で出されるご飯についてメニュー報告のようなことをしてくれていた。妻にとつては入院していた病院は食事的には「当たり前」のようで、寝ているか検査されているかの二極的な入院生活では、ご飯だけが唯一と言って良いほどの楽しみになっていたようである。そして妻には食欲がやや戻ってきていた気配だった。

「今度、トーストサンドが食べたい。」トーストサンドやで。焼いたやつ」

「何挟んだらええの？」

「うーん、タマゴ」

「ああ、タマゴサラダやなくて、卵焼きのような感じのタマゴな」

「そう、そう。ケチャップつけてオムレツのようにしてな」

妻とは他愛ない会話が続いた。残念ながら妻がリクエストしたタマゴのトーストサンドの提供は未だ会話の中だけだった。それでも私にとっては会話だけで十分だった。何故なら他愛ない会話を続けること自体が私と妻にとっては和みの時間のようであり、大切な時間であり、実際に何かを食べるよりも会話の方が心が弾んでいたからである。

一か月後、無事に手術と療養を終えて退院した妻は何かを決めたような様子だった。平素の生活でも欲を出すような妻ではなかったが、更に欲は出さず、我が儘も言わずただ素直にしていた。それはまるで有り体として時間の流れを素直に感じているかのようにだった。

間もなく桜が咲く頃になり、南方から桜<sup>※</sup>もだが吹

くだろう。だから早速に妻がリクエストした通りのタマゴのトーストサンドを作ろうか。そうすれば妻は好きなトーストサンドと共に元気になるだろう。

退院した翌日、静かな朝のひと時、三人掛けソファで私の隣に座っていた妻は何かを期待するような真ん丸い目で私を見ていた。

「さっちゃんの好きなタマゴのトーストサンド作ろうか」

「うん、食べる。きつね色に焼いてな」

灰色ではない現実世界の色づく季節の中で私は妻という色に話しかけていた。

※桜もだ……「桜まじ」の方言

秀  
作

ハッピーワイフ、ハッピーライフ

団  
周五郎

我が家は子供が巣立って嫁との二人暮らしだ。一昨年、六十五歳で僕は働くのをやめた。ここから先は働くより好きに遊ぶ生活をやってみたかった。嫁のほうは今年六十四歳、パートではあるが定年になるまでは働くと言っている。えらい、頑張つてくれ！ 結果、朝「行つてきます」と玄関を出ていくのが嫁で、「行つてらっしゃい」と見送るのが僕という生活とあいなつた。

朝、嫁が出て行つた後、僕は玄関の扉に耳をつけるようにして嫁の足音を聞く。カツカツカツという靴の音が聞こえなくなるまで鍵を閉めない。追いついたように閉めてはいけない気分になるのだ。しばらくして足音が聞こえなくなつた頃、そつと音がしないように鍵を閉める。カチツと音がる。そのとき、なぜかホツとする。

一人になつたから…… 嫁がいなくなつたから……？ とにかくホツとするのだ。その後、趣味のテニスで仲間と遊んだり、地区の高校野球や吹奏楽コンクールを見に行つたり、お金がかからず青春を味わえる素敵な時を過ごしている。今は全身全霊で

幸せを享受している感覚だ。

これが嫁のお気に召さないようだ。僕の嫁は真面目が取り柄のA型人間。公務員だった親から「働かざる者、食うべからず」としつけられた人間だ。昼間から遊んでいる者はうつけ者だと思っている節がある。

その気持ちはわからないでもない。だから遊びのことはあまり話さない。けれど長年一緒に暮らしていると雰囲気でわかる。「なに隠しているのよ」って感じで、かえって嫁の機嫌を損ねているのかもしれない。いつの間にか僕は肩身の狭い思いをするようになり、これが原因でホツとするのだろう。

先日たまたま見たテレビドラマで、嫁が定年退職した夫に、

「私、フゲン病になってしまったの」と言う。

フゲン病というのが何のことなのかわからず調べてみたら、夫源病と書く。旦那がずっと家の中にいることでストレスが嫁に溜まり精神的に参ってしまう病氣のことを言うそう。このとき、フツと気がついた。

僕が今感じるこのホツは、世の中のサラリーマンの嫁が毎日味わっている気持ちなんじゃないだろうか。何十年も家族のために朝から深夜まで頑張ってきた旦那には誠に申し訳ないのだが、その間に嫁は家の中で、嫁しかわからない時間と空間を作ってしまったのだ。

その時間をだれにも潰されたくない。イケメンが一緒にいるのならまだしも、口うるさい昭和頑固おやじが二十四時間自分のことを「おーい」と呼びか呼び捨てにする。若いころからずっとそうであっても、この野郎！と思う気持ちのだろう。うちの嫁も自分の時間をうつけ者につぶされたと思っただけでもない。不思議ではない。

知り合いの会社から電話があった。

「人手不足で…… なんとかならないか？」

という。最近の人手不足は、僕のようなものにも助けを求めてくる。考えさせてくれと返事したが乗り気にはなれない。嫁に話をしたら、

「絶対行った方がいい。せっかく声をかけてくれたんだし……」

と強く推す。でも今の生活リズムは手放したくない。心からそう思うのだ。

それからしばらくして、冬が来て、北海道にしては気温が高くなった日の朝だった。僕の思いがころりと変わる事件が起きた。

凍てついていた凍結路面の氷が少し緩んできたときだった。自分の足元を見るのをおろそかにしていた。あつと思つた瞬間だった。左足が滑り慌てて踏ん張つた右足も滑り、自分の体重が全部左足の上に乗ると落ちたのだ。うっ！！ 激痛が……まさか…… ただならぬ痛みにヤバいと思いつきながら、気合で左足を引かず家にとどろつき、居間のソファに倒れこんだ。嫁が駆け寄ってきて、象の足のようになつた僕の足を見て、保冷剤を用意し、健康保険証、整形外科の診察券やらタクシーの手配やらチャチャツツと準備し、病院へ直行、診察の結果、くるぶしの骨折だった。

その日から入院となつたのだ。その後、着替えやら、洗面道具やら一式持つてきてもらった。嫁には感謝で頭があがらない。心配メールもよく来る。病

院のベッドの上でメールを読みながら僕は思う。我が家は二人だけ、これからお互い老いてゆく。助け合つて生きてゆかねばならない。一人だけ幸せになつて喜んでいる場合じゃないぜ。二人とも幸せになるには、嫁をイラツとさせないことだ。嫁がハッピーでなけりゃ、幸せな暮らしはやつてこない。わかつたよ。僕の幸せは半分あきらめる。骨がくついたら、嫁がホツとできるよう働きに出てみようと思う。ハッピーワイフ、ハッピーライフだ。